

## 教科書における無標の過去時制：半過去の教え方

川島 浩一郎

KAWASHIMA Koichiro

Université de Fukuoka

k-kawa?cis.fukuoka-u.ac.jp

### 0. はじめに

教科書に記載する説明は、できるだけ事実に基づいていたほうがよい。事実を歪めた説明は、たとえ当初は理解しやすくとも、いずれ軌道修正が必要になる。

いわゆる半過去は、無標の過去時制形態素として捉えるのが最も事実に近い。形態素は記号素と言い換えてもよい。動詞の半過去形には半過去形態素が含まれ、単純過去形には単純過去形態素が含まれる。半過去形態素は、過去性を標示することしかできない純粹な、単なる、普通の過去時制である。単純過去形態素は過去時制であるだけでなく、事態の完了を含意する。したがって単純過去が有標の過去時制形態素であるのに対して、半過去は無標の過去時制形態素だということになる。

- a. 教科書では、半過去が形態素であることに対する言及が非常に少ない
- b. 教科書では、半過去形が単なる過去形であることの明示が意外に少ない
- c. 教科書では、具体的な個々の用法を単に例示するだけの説明が多い
- d. 教科書では、未完了用法が強調されることが多い

したがって半過去の説明を効率化するには、それが無標の過去時制形態素であるという事実をふまえたうえでの検討が必要である。実際、近年刊行された30冊の初習者用教科書を参照した結果、上にあげた4つの傾向を見いだすことができた。少なくともこれら4点には、何らかの検証や改善の余地があると考えられる。

### 1. 半過去形態素：無標の過去時制形態素

#### 1.1. 半過去形態素 (半過去記号素) と単純過去形態素 (単純過去記号素)

動詞の半過去形には半過去形態素が含まれ、単純過去形には単純過去形態素が含まれる。たとえば *elle marchait ...* と *elle marcha ...* には、同一の動詞形態素が含まれる。よって *marchait* と *marcha* の語形が異なるのは、これらに別個の表意単位が含まれているからだと考えざるをえない。前者にあって後者にない形態素を、半過去形態素と呼ぶ。後者にあって前者にない形態素を、単純過去形態素と呼ぶ。

したがって、動詞の半過去形や単純過去形が担う用法を、半過去形態素や単純過去形態素の機能と同一視できるとは限らない (2.1.を参照)。半過去や単純過去の動

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

詞形は、半過去形態素や単純過去形態素そのものではないからである。

### 1.2. 半過去形態素：純粋な過去時制形態素

半過去形態素は、過去性を標示することしかできない(参考文献を参照)。いわば純粋な過去時制形態素である。たとえば(1)の *il est ...* は「現在の時刻」を表し、半過去形態素を用いた(2)の *il était ...* は「過去の時刻」を表現する。これらの違いは、事態の時間的な位置づけが「現在」にあるか「過去」にあるかだけである。(3)の *j'étais* の半過去形態素は、事態の時間的な位置づけを「現在」から「過去」に訂正するためにのみ使用されている。(2)や(3)における半過去形態素の存在理由は、事態に過去性を与えることであって、それ以上でも以下でもない。

- (1) *Il est une heure du matin !* (K. Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*)
- (2) *Il était une heure du matin.* (M. Chattam, *Maléfices*)
- (3) *Je suis chez moi ! Enfin, j'étais.* (M. Levy, *Et si c'était vrai...*)
- (4) *Je m'apprêtais à rentrer, lorsque je tombe sur lui.* (*Elle*, 18 juillet 2005)
- (5) *Le 21 mars 1943, j'ai dix-huit ans, je suis monté dans le tramway [...].* (M. Levy, *Les enfants de la liberté*)
- (6) [...], le printemps *finissait* toujours par revenir. (M. Levy, *Mes amis Mes amours*)
- (7) *Je finissais à peine ma phrase quand Betty s'est pointée.* (Ph. Djian, *37°2 le matin*)

したがって半過去形態素には、事態が完了しているか未完了であるかの区別もない(2.4.および参考文献を参照)。一般にアスペクトを標示する形態素が不在であれば、事態が完了しているか未完了であるかは解釈や動詞形態素の性質の問題となる。たとえば直説法現在の動詞形は、(4)の *je tombe ...* のように完了した事態と解釈されることもあれば、(5)の *j'ai ...* のように未完了の事態と解釈されることもある。これと同様に、半過去形態素を使って表現された事態は(6)の *le printemps finissait ...* のように完了していると解釈されることもあれば、(7)の *je finissais ...* のように完了していないと解釈されることもある。事態が完了しているか未完了であるかは、半過去形態素にとっては非本質的な、単なる解釈に過ぎない。

### 1.3. 単純過去形態素：事態の完了を含意する過去時制形態素

単純過去形態素は過去時制であるだけでなく、事態の完了を含意する。たとえば *je regardai Anne* を、未完了の事態として解釈することはできない。単純過去形態素を除去した *je regarde Anne* には未完了の事態としての解釈がありうる(これから見る、見ている最中だ)。しかし *je regardai Anne* には、その可能性がない。

したがって単純過去形態素は、純粋な過去時制形態素ではない。事態の完了の標示は時制というよりも、アスペクト的な特徴である。単純過去形態素は事態に過去性を与えるだけでなく、完了アスペクトも含意した形態素なのである。

### 1.4. 有標の項と無標の項

言語単位である X と Y が次の2条件を満たすとき、X を有標の項と呼び、Y を無標の項と呼ぶ。(a) X と Y に共通部分がある。(b) X が Y にはない非共通部分をもつ。有標の項は「共通部分 + 非共通部分」であり、無標の項は「共通部分」である。無標の項は、有標の項と無標の項の共通部分だと言うこともできる。

単純過去形態素が有標の項であるのに対して、半過去形態素は無標の項である。半過去形態素と単純過去形態素には、過去時制形態素であるという共通部分がある。そして半過去形態素が純粋な過去時制形態素であるのに対して(1.2.を参照)、単純

過去形態素には事態の完了を含意するという非共通部分がある (1.3.を参照)。

## 2. 初習者用教科書における半過去の説明：傾向とその検討

### 2.1. 半過去形態素の存在に対する言及の欠如

いわゆる半過去が単一の形態素であることに言及する初習者用教科書は、非常に少ない (1.1.を参照)。ほとんどの場合、*était* や *avait* のような語形全体を「半過去」「直説法半過去」あるいは「半過去形」「直説法半過去形」と表現するにとどまる。形態素 (あるいは記号素) という用語の使用はともかくとしても、半過去の動詞形に事態の過去性を標示する記号が含まれていることさえ説明はなされない。

(8) *Le patron était un ami, [...].* (T. Jonquet, *Du passé faisons table rase*)

(9) *Le patron est un ami.* (B. Aubert, *Funérarium*)

その結果、半過去という動詞形に対する説明そのものが不正確にならざるをえない。半過去の動詞形を、半過去形態素と同一視することはできないからである。たとえば (8) における半過去形の用法が「過去における状態」の標示と言われることがある。しかし *était* が「状態」の表現でありうるのは、半過去形態素の存在のためではなく、動詞形態素の性格による。実際、同じ動詞形態素を使った (9) の *est* の用法を「現在における状態」の標示と表現することは可能であろう。半過去形を動詞部分と半過去部分に分節する観点に欠如しているために、あたかも半過去形態素が「状態」を標示しているかのような錯覚を与えかねない。

したがって半過去形態素については、その存在を効率的に理解させる教材が必要である。学習項目の取舍選択は、確かに教授法の重要課題である。形態素という概念は、初級文法の枠組をこえるかもしれない。しかし難しい知識は与えないという選択を安易にしたり、一時かぎりの方便に逃げたりする前に、必要な事項であれば理解しやすいかたちで提供する工夫を試みることも教授法の役割であろう。

実際、語形変化の仕組みを正しく理解するためには、形態素という概念はいずれ必要となる。縮約 (たとえば *au* の内部に *à* と定冠詞が同居していること) が理解できる学習者であれば、*était* の内部に動詞形態素と半過去形態素が同居していることも、難なく受け入れることができるのではないだろうか。

### 2.2. 動詞の半過去形が過去形であることの非明示

半過去形が過去形であることを明示する初習者用教科書は、意外に少ない。ここで言う「過去形」は「無標の過去時制を標示するための動詞形」のこととする (1.2.と 1.4.を参照)。いわば純粋な、単なる、普通の過去形である。ほとんどの初習者用教科書では、諸用法の説明に「過去のある時点における」「過去のある時点で」「過去のある時点に視点あるいは基準をおいて」「過去において」「過去における」「過去の」などの文言を付け加えているに過ぎない。半過去形が本質的に何を標示するための動詞形であるかという総括的な記述は、なされないことが多い。

その結果、半過去形は普通の過去形であるという認識への到達は、学習者側の推論に委ねられることになってしまう。「過去のある時点」「過去において」「過去の」などから共通部分を抽出しさえすれば、半過去形が過去形であることはいずれ理解されよう。しかし学習者がそのような推論に成功するという保証はない。

(10) *He was a pretty boy, my burglar.* (W. Gibson, *Neuromancer*)

(11) *I had forgotten I was a man !* (C. Castaneda, *The Teachings of Don Juan*)

## Rencontres Pédagogiques du Kansai 2014

半過去形は単なる過去形であるという事実は、いずれかの時点で、教授者側から提供したほうがよい (2.3.を参照)。過去形 (無標の過去時制を標示する動詞形) という概念は学習者にとって、目新しくも理解困難でもない。少なくとも「複合過去」「半過去」「大過去」「近接過去」などの用語を受け入れることのできる学習者が、過去形という概念を理解できないはずがない。英語既習者であれば、純粋な過去時制という文法事項は既に経験済みでもある。たとえば (10) の *he was ...* や (11) の *I was ...* における動詞形 (いわゆる過去形) を *he is ...* や *I am ...* と比べれば、それが事態に過去性を与える以上の働きは何もしていないことは明らかであろう。

### 2.3. 用法の列挙のみによる説明：半過去そのものに対する検討の欠如

初習者用教科書では、半過去形の具体的な用法を単に例示するだけの説明が多い。半過去形が何を標示するための動詞形であるのかを明確に提示する教科書は、意外に少ない。初習者用教科書で言及される代表的な用法を、次に列挙する。

- a. 過去のある時点において進行中、継続中、未完了の行為、状態、動作を表す
- b. 過去における習慣を表す
- c. (現在と対比させて) 過去における状態、状況を表す
- d. 時制の一致で、過去における現在を表す
- e. 過去において繰り返し行われた行為を表す
- f. 終点が明確でない過去の出来事を表す
- g. 他の出来事と同時性のある過去の出来事を表す
- h. 過去のある時点で出来事が起きたときの背景 (状態や状況) を表す
- i. 過去のある時点における眼前描写を行う

しかし基本用法を単に例示するだけでは、半過去形そのものを説明したことにはならない。具体的な用法の例示は確かに必要不可欠であるが、だからといって、半過去形が過去形であることをあえて伏せる理由はない (2.2.を参照)。多様な用法を提示すればするほど、学習者が本質を見失う可能性もある。

- (12) *Il y a quarante ans, le 27 août 1965, le Corbusier mourait. (Elle, 19 septembre 2005)*
- (13) *Elle s'appelait Mathilde. Elle s'appelle toujours Mathilde d'ailleurs. (A. Gavalda, Je l'aimais)*
- (14) *À minuit cinq, le médecin lui ouvrait enfin, blême et ébouriffé. (F. Vargas, Dans les bois éternels)*
- (15) *En Israël, j'ai rencontré Arno Klarsfeld, que je connaissais déjà à Paris. (Elle, 11 avril 2005)*

実際、半過去形の用法は多岐にわたり、そこには (過去性の標示を除けば) 共通部分がほとんどない。(12) のように、半過去形が進行中の事態に対応しないこともある。半過去形で表現された事態が眼前描写や背景、習慣、反復する行為でないこともある。(13) のように、現在との対比を含意しないこともある。(14) のように、終点が比較的明確な事態に対応することもある。(15) のように、他の事態との同時性を含意しないこともある。時制の一致で使用されるとも限らない。

半過去の本質が何であるかという指針は、それを学習者側の推論に委ねるのではなく、適切な時期に、教授者側が与えるべきである。それに適切な時期が、具体的な用法を提示する前なのか後なのか、あるいは同時進行的になのかについては、

個々の用法を提示する順序も含めて、今後の課題としたい。

### 2.4. 未完了用法の強調

初習者用教科書では、とくに複合過去形との対比において、半過去形の未完了用法が強調されることが多い。単なる過去形である半過去形は、確かに事態の完了を明示しない。そのため、単純過去形や複合過去形と比べれば、(16) の *tu bâillais ...* のように半過去形が進行中の事態に対応しやすい傾向がないわけではない。

(16) *Tu bâillais devant un livre quand je suis entrée ! (M. Levy, Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites)*

(17) *Autrefois ses provocations faisaient sourire ; maintenant elles font de la peine. (F. Beigbeder, 99 francs (14,99 euros))*

しかし、半過去形が常に未完了の事態を表現するわけではない。たとえば (17) の *ses provocations faisaient ...* を未完了の事態だとすることは、いかなる観点でも不可能である。この事態は進行中でもなければ、現在時間において継続中でもない。

したがって、未完了用法の過度な強調は避けたほうがよい。半過去形が未完了の事態に対応しないことは、けっして少なくない。未完了用法を提示する際には、それが用法全体の一部に過ぎないことを理解させる必要がある。

### 3. まとめ

動詞の半過去形を特徴づける半過去形態素は、無標の過去時制形態素である。半過去形態素は、過去性を標示することしかできない純粋な過去時制なのである。半過去の動詞形が担う個々の用法の成立はいずれも、この事実立脚している。

無標の過去時制形態素であるという観点から初習者用教科書における半過去の説明を検討した結果、次にあげる4つの傾向と改善案を見いだすことができた。

a. 半過去が単一の形態素であることに言及する初習者用教科書は、非常に少ない。半過去の動詞形と半過去形態素の区別を平易に解説する試みが必要である。

b. 半過去形が過去形であることを明示する初習者用教科書は、意外に少ない。半過去形が純粋な、単なる、普通の過去形であることを明記する必要がある。

c. 初習者用教科書では、個々の用法を単に例示するだけの説明が非常に多い。半過去が何を標示するための動詞形であるのかを、総括的に提示する必要がある。

d. とくに複合過去形との対比において、半過去形の未完了用法を強調する初習者用教科書が多い。未完了用法を過度に強調することは、避ける必要がある。

### 参考文献

川島浩一郎 (2006) 「フランス語の複合過去と半過去に関する一考察 — 時制とアスペクトの間接的対立 — 」『福岡大学研究部論集』A 第6巻3号, 37-61: 川島浩一郎 (2012) 「半過去と未完了解釈 — 完了か未完了かの区別を含意しない過去時制 — 」『福岡大学人文論叢』第43巻4号, 817-833: 川島浩一郎 (2012) 「過去時制と非現実解釈」『ふらんぼー』第37号, 東京外国語大学フランス語研究室, 17-35: 川島浩一郎 (2012) 「時間的な対比を表す半過去について」『福岡大学研究部論集』A 第12巻2号, 9-13: 川島浩一郎 (2013) 「半過去と非現実の帰結 — 間一髪半過去をめぐって — 」『福岡大学研究部論集』A 第13巻1号, 25-31: 川島浩一郎 (2014) 「複合過去と単純過去の対立の中和」『ふらんぼー』第39号, 45-65.